



上・肥培林の成果を調査し、データを記録



上・下刈機の講習も
右下・枝うちの指導
実地で……



左・今日も山麓を走る



〈カメラ・スケッチ〉

山のコンサルタント

— 林業改良指導員 —

林業経営のことならなんでも受け合い。林業家から林研グループの指導まで、山歩きがいうなれば商売だ。反面、木材市場での流通指導などナイーブな活動もみの信頼を裏づける大切な仕事だ。



上・共販市場の立合いは大切な役目でもある
下・山の男ならではの林研の青空研究会に出席



〈第一線の人々〉

林業改良指導員

— 鹿北町担当・Sさんの場合 —

「もうほかにありませんか、ありませんかノ開札しますッ。——落札、九番さん。一万六千円。二番札は十二番さんでした。」次へ行きませアす。杉、皮つき、十六層ものノどうぞノ。」

威勢のいいかけ声が聞えてくる。ここは、鹿北森林組合木材共販所。

林業改良指導員として鹿北町を担当しているSさんの日曜日は、この早朝の木材共販市で始まった。指導員の場合、まず土曜も日曜もないといつて良い。いや、部落単位の研究会などほとんど夜だし、昼も夜もない勤務といえる。しかし、根っからの山男Sさんは、みるからにエネルギーをこまめに動かして、需要期前で、扱い量が少ないとはいえず、共販所前の広場を埋めた原木の間を動き回っている。

山の仲間の

青空教室

昼近く、ようやく市が終った。Sさん

は、森林組合の技術員数人と、肥培林業の実績をあげている広見地区半生部落のNさんの家へ一緒に行くことにした。研究グループの一行は、早速Nさんの山をみせてもらう。杉の成育に適した肥沃な岳間地区と比べて、この広見地区の山はかなりのやせ地である。しかし、Nさんの施肥林が、隣接する無肥林と非常にはっきりした差異をみせているのがよく判る。Sさんを聞いて、その場で青空研究会が始められた。

何しろ、肥料をやったのと、そうでないのとのサンプルが目の前にあるのだから、これ以上の良い教材はない。

「植栽後の五年間の撫育作業の過程で、石灰窒素を反当半俵あて施してあります。うつ蔽したら、下刈りの必要もなくなるから、肥料もやらず、十五年生から再び、反当一俵の施肥を始め、樹齢に応じて、次第に肥料も増やしてあるわけです。」説明が具体的にたつて、皆の目が輝く。「肥料をかき上げる労力

も大変だが、肥料代も大したもんだらう。せめて、肥料代に補助でもあったらなあ。」と誰かがつぶやく。

みんなで材積を計算してみることにした。施肥林の方が、平均樹高、平均胸高径それぞれ十センチに十四センチ、無肥林の方は六センチに十センチ。おまけに施肥林は間伐をやっているからその代金はいる。肥料代を精算しても、時価で算出して、約四・八倍という結果がでた。みんなあらためて、施肥の威力に驚く。

頼もしい、

山の巡回医

Sさんは、それから足をのぼして、以前から相談をうけていた家へもまわってみた。相談というものは、最近、杉の葉が赤くなって、どうやら虫がついているようだから一べんみてもらいたいというのである。「スギタマバエの駆除のこと。」

「幼木の成育がどうも良くないが、何故だろう。」その外、この種の相談が、Sさんの手もには、ひっきりなしに届く。

いふならば山の巡回医という処。

山へ案内されたこの巡回医師は、まず、「あれ、スギタマバエが少し残りましたね。」と、早速診断だ。駆除のタイミングがずれたのであろう。生き残った奴がいたのだ。「この秋の越冬前にですね。洗面器か何かに水を張って、山の中に置いておくですよ。すると虫の一番落ちる時期がよくわかりますから、その時

期はずさぬように。」カルテが渡された。

杉の葉が赤くなった原因はすぐわかった。Sさんは、幹の根元にしやがみ込んで、虫の糞を見つけると、皮をえぐり取った。樹脂にもぐり込んだ一匹ばかりの幼虫がつまり出される。「これだけじやはっきりしませんか、スギザイタマバエの幼虫と思えます。はつきりしたこと、それから防除などについて、すぐあとで連絡しましょう。」虫は、専門技術員に送るため、フォルマリンのビン詰にされた。

Sさんは、鹿北町担当だけで五年になる。前任地菊池郡には七年半いたから、指導員としてはもうベテランの方だ。鹿北町の林業は小口のようなはずば抜けた地域を除くと、一応県下の先進林業地方といえる。特に、森林組合の充実ぶりが立派だし、Sさんとしても、やり甲斐がある。岳間森林組合のCさんなどは、Sさんとガッチリ、コンビを組んで、それぞれ一歩一歩と地元林業を前進させている一人であろう。このコンビは、さきに肥培管理による短期伐採の効果を試算して、金利表を作成してみた。理論上の結論ではあるが、伐期を二十五年とした場合は、伐期三十年の場合の利廻りの倍に近い高率となる。いま二人は、実際の裏付け資料をうるため、さきの広見地区Nさんの成果を見守っているのである。